

## 日本林学会九州支部50周年記念大会

### 日本の森林文化の創造

— 今後50年を展望して —

それでは、定刻になりましたので只今から記念講演に入らせていただきます。本日の演題は、『日本の森林文化の創造 — 今後の50年を展望して —』であります。お話ししていただくのは、山形大学名誉教授の北村昌美先生、鹿児島大学教授で日本林学会九州支部長でもありました今永正明先生、さらに弁護士で、福岡県の森林審議会委員でもあります山本智子先生の御三方です。ここで鼎談していただきます御三方の先生のご紹介を、福岡県森林林業技術センターの木村部長からさせていただきます。

木村 センターの木村でございます。さて御三人の先生のプロフィールをご紹介したいと思っております。山形大学名誉教授の北村昌美先生は1950年、京都大学農学部林学科をご卒業になりまして、高知大学を経られ、55年に山形大学農学部助教授、70年同大学の教授、64年には博士号を取得なさっております。66年から西ドイツ、フライブルグ大学に文部省在外研究員として学ばれました御縁から、73年から1年間、同大学の客員教授をされております。その後、山形大学の農学部長を3年間なさられて、92年に御退官ということでございます。現在、中央の森林審議会委員、あるいは、鶴岡総合研究所の所長、秋田営林局の国有林管理審議会会長、その他多数の役職を兼ねておられるところでございます。主な著書としましては、「森林と文化」、「森を知ろう、森を楽しもう」、「草原の思想、森の哲学」など多数ございます。さらに森林計測学の分野における業績などが評価されまして、日本林学会賞、豪雪地の林業技術に関する業績が認められまして川喜多文化賞、あるいは日本雪庇学会の功績賞などを授与されているところでございます。鹿児島大学の今永正明先生は1962年に京都大学農学部林学科をご卒業になり、一時林野庁林政課に勤務されまして、その後66年に京都府立大学農学部、70年には山形大学農学部助教授、さらに83年には鹿児島大学の農学部の教授として赴任されております。御存知のとおり、先ほどまで日本林学会の九州支部長としてご活躍いただきました。また先生は現在鹿児島県の森林審議会委員などされております。なお先生は、しばしば外国に留学されておられて、西ドイツに3回、フランスに3回、ブラジルに2回など、数多くの外国の研究の実績がござ

います。次に弁護士の山本智子先生は福岡の双葉学園高校を卒業されまして、早稲田大学の法学部に学ばれ、1976年にご卒業、79年に司法研修所に入所されまして81年に修了、そして同年に弁護士を開業されております。開業の傍ら87年から足かけ3年間RKBのニュースキャスターとして活躍されまして、同局の視聴率向上に大きく寄与されたと聞いております。その後、91年にはウイスコンシン州立大学の法律学部で法律を学ばれ、また翌年には、コロンビア大学で法律を学ばれるなど、数々の実績がございます。88年から、我が県の森林審議会の女性委員としてご活躍をいただいております。以上でご紹介を終わります。

それでは先生方よろしく願いいたします。まず今永先生に口火を切っていただけたらと思います。今永 大勢の方にお集まりいただきまして、こういう試みをやるということ、まあ私が仕掛人になっておりますために、私からお話し申し上げたいと思っております。只今ご紹介いただきましたように北村先生は、私が13年間、鶴岡でお世話になった先生でございます。私もこちらにきて11年になりますから、もうかなり前の話になるのですが、その当時「森林と文化」という本を東洋経済新報から出されて、その本が非常に評判のいい本でありまして、日本エッセイストクラブ賞の候補作にもなったような御本でした。その副題が、「シュバルツバルドの手記」でございまして、最初にシュバルツバルドの手記のことを、非常に情緒豊かに書かれております。それから、その後、各ドイツの営林署における森林の技術的な問題、森林の取り扱い、創造の技術的な問題が書かれておりました。その事を思いますと、今、森林と文化というような話があちらこちらで出てきておりますけれども、先生は、かなり前からそういうことに興味を持ってやられておったように思います。さらに先生は、たとえば比較文明学会といったような、非常に我々の分野と違うような感じを受ける学会に入られて、それを主催されるようなことまでやっておられると聞いております。それから山本先生におかれましては、本当に私も数回しか会ったことしかございませんが、林学関係の我々が書いた資料にも全部目を通して下さるなど、非常に優れた方でありまして。特に私が今日期待しておりますのは、先生が、

県の森林審議会にお入りになって、もう何年か経つようでございますが、我々の立場と違う立場から、どういふに我々の林業とか林学というものをみておられるか、そこら辺から口火を切っていただいて、最初は現在の林業、林学のあり方と現在の状況というお話をさせていただいて、それから森の将来ということに、話を進めていただければいいんじゃないかと思っております。それでは早速ですが、山本先生の方から森林審議会に入られてのご感想あるいは、いろんなご意見、何でも結構ですからお話し願います。

山本 はじめにお断りを申し上げますが、私は、なぜ、真ん中に座らなければならなかったのかについては、全然わかりません。本来ならどちらかの端、裁判所で申しますと、左陪席が適当であると思っておりますが、突然真ん中になりまして、これは両者から、いろいろ責められる立場になるのか、両者を責めていい立場になるのか、非常によくわからないところに門外漢が座りまして、いろいろお聞き苦しい点が多々あるかと思っております。それとも一つは私が横に行きまして司会を始めると、延々としゃべるのではないかと思います。弁護士というのはしゃべるのが商売でございます。あんまりしゃべるなという意味でもあるのかなとも思っております。それはともかくといたしまして、私は1988年から福岡県の森林審議会に参加させていただいております。全く林学、あるいは森林というものについて知識があったわけではございません。たまたま水産林務部の方が、テレビで私を見て、あれがいいと言って、一本釣りをされたという経歴でございますから、最初の1年は何一つわかりませんでした。計画案が送られて参りまして、とにかく読んでいかなければいけないと思うわけですが、書いてあることの意味がさっぱりわかりません。続きまして審議会に参加いたしまして、皆さんが言ってらっしゃる言葉が全然わかりません。漢字はどれを当てはめていいのか全然わからない。非常に象徴的な話が、「カンバツを実施し、云々」というのがありますが、私はカンバツを実施しというのは、主語と述語が変なんじゃないか、「干ばつが起こり」ではないか、「干上がる」方ではないか、「干ばつを実施し」となると、要するに年に何回も干上がらせなければいけないのかというような誤解をしたくらいです。1年はただひたすら黙りを通しまして、皆さまが何をやってらっしゃるのか、一体ここは何をやる場所なのかということを見せさせていただいたわけですが。現在で三期動機させていただいておりますけれども、二期目にはいる前から、大変でいらっしゃることが徐々にわかり始めてまいりました。つまり、「お金がない」、「赤字である」、「人は

足りない」、「もうだめだ」、「経済性がない」、「売れない」ということが。そのとおりだろう、大変であるなあと思ったわけです。施業が大変なことかわかるわけです。じゃあ皆で基金を募ろうではないかというような話が時々あって、現実にはいろいろな基金を設けていらっしゃるわけですが、そのお金の回り方をみると、また不思議なんです。そういう基金ボックスがある、あるいは基金がありますということを知っているのは、林業者の方だけであって、林業者の方が、その基金にお金をお入れになると、そのお金はまた林業者のどなたかにお回りになる。結局お財布が移っているだけで、林学あるいは林業に携わる経済圏の中だけで動いておられる。門外漢の一般市民からみた場合、私が一般市民の代表かどうかは別にいたしまして、そのようなことが大変であるとか、そういう施業が実施されているとか、どういう現状にあるのかということは全く知らないわけですね。大変だ、大変だ、皆で助け合おうというだけで、外には何一つ訴えかけがないのです。これは非常に不思議だったんです。おつき合いをいたしましてよくわかったのは、いわゆる森を研究される方、森の民という方は、非常に温厚な方が多く、外に向かって戦闘的になられる方があまりおいでにならないということを感じたんです。大変ならば、あるいはこれを理解してくれというならば、なぜ外に向かって言わないのかと。あれが悪い、これが悪いと自分たちの中でいうよりも、なぜ外の文化にもう少し、何かコネクションを設け、あるいはリンクして、訴え、挑戦をしないのかと、審議会では、私は専門的なことを全然質問できないもんですから、「その他」という項目のところで、一生懸命いつもそればかり言うんです。第三者から見た感想として、技術的な問題、予算的な問題はもちろんです、これはもう外と連携しなければ解決できない問題ではないかと思うのです。たとえば相続税だってそうです。経済性であれば、なぜ企業と連携しようとしなかったのかと思います。またその森林のレクリエーション、あるいは森林の愛し方という問題に関しても、単にハイキングにいらっしやいでなくて、なぜもっと外の社会、たとえば文化人類学もそうでしょうけれども、そういうところとお話をされないのかと思っております。いわゆる一つの宇宙船の中に籠もっていらして、助けてくれとか、あるいは互いに話そうと言えば、無線通信のきくところにはたくさんの宇宙船があるのに、なぜじっとしておられるのかと、非常に素人考えですけれどもそれを悔しく思うわけです。長くありませんでしたが、これが私の正直なお話でございます。

今永 北村先生、他に何かございませんでしょうか。

北村 私はこれまでに何回か九州におじゃまして、九州大学でお世話になったこともございます。そういう意味で、今回非常に懐かしさが先に立って、お引き受けしたんですが、来てからしまったなあと思っています。というのは遠くから参りますと、それにふさわしいことを言わないかんでしょうから、本当にどうしようかと思っているんです。只今山本先生からお話がありましたように、外との関連が切れているというところに問題があることは、私も本当に同感であります。今日の現状を少し押さえた上で、将来を展望するため、現状についての私なりの解釈をまず申し上げたいと思います。非常に不思議な感じがするんですけど、外の社会では林学、あるいは林業の世界に関心がないと言いますか、連絡が切れていると言いますが、しかし今、森林とか緑とかいうものへの関心は、見かけかも知れませんが、かつてなかったほど高まっているわけです。口を開けば緑が大切だと言うし、森林を愛しましょうというような話も、方々に聞かれます。新聞でも緑が、あるいは森林が登場しない日はないんです。それくらい関心が高まっているのに、どうしてこの林業の中を覗こうとする人がいないのかというのが、私ども内部の社会から、ものを言うときの不満でもあるわけです。ちょうど山本先生のお話を裏返しにしたようなところがあります。でもしばしば考えることですが、見かけの関心だけでしたら、持ってくれない方がいいときえ思います。ただ私どもとしてはもう少し、交流がなければならぬというふうに思います。林業、あるいは林学の中の人の怠慢ということも、確かに反省をすべき点ではありますが、これはもう非常に根の深い問題で、これこそ今日の表題になっています。文化的な課題だと思うんです。というのはよく知った上で関心を持つのと、そうでないのとでは、ものすごい違いであります。その辺に問題点が潜んでいるというふうなので調べてみました。私の標榜しているスローガンみたいなものは、人間の意志によって森林はどのようにでも変わるんだということです。つまり人間が文化的な行動をし、文化的な思考をすれば、それは森林に反映する。だから森林は文化的な創造物だと申し上げました。そうすると、かなりその頃は抵抗がございました。森林のような野生そのものを、文化的創造物とは何だというようなことでした。それが文化的創造物であるためには、森林に対する住民の意識が一番大事だということで調べてみました。このとき日本人は自然を愛して、林業のことも理解がある民族だと思って調べたんですが、あにはからんや、これがもう全く外国とは逆でした。ヨーロッパの間人は、神様の作られたものは大事に

するけれども、そういう意味で森林は大事にするけれども、そうでない森林は大事にする気持ちも畏敬の念も持たないのではないかと、それに対し日本人は森林を愛し森林におそれを抱き、そしてその立派な木を御神木として、しめ縄を巻いて崇めるのではないかと、これは日本人の美徳である。だからその意識を調べてみれば、私は必ずヨーロッパよりも日本人の方が、自然に対する愛着心が強いと思っていたんですが逆でした。しかしアンケート調査をやりますと、日本人の答えは、往々にして自分の思ったことよりもその質問の中から正解を選ぶということをやります。散歩するのが好きですかと言ったら、「好き」というのが正解だから○をつける。自分が好きか嫌いかは、全然関係ない。ですから正解のわからない質問を出すと、そこに本音が出てまいります。それを総合しますと、日本人ほど乾いた人種はなく、私は現在の日本人には森林はいらないのではないかとさえ思っています。そうすると森林の中で働いてる人に目が届くはずがないわけです。将来を展望するときにこういうことがある程度わかった上で、森林というものの本来の姿、それと人間の関係の本来あるべき姿、これを見つめ直すのが今日の我々の使命だろうと思っています。最初の話はこれくらいにいたします。

今永 もうこれ以降はお二人にご自由にしゃべっていただければいいんですが、ちょっと先程、言葉がわからないという問題が北村先生の方から提起されました。北村先生、言葉の問題はどのようにお考えでしょうか。つまり林業用語というか、林学で使っている言葉です。

北村 林業用語の問題がよく話題になります。今永先生の質問とはちょっとずれるかも知れませんが、林学、林業が全く知られていないから言葉が知られないんで、言葉を知ったら知られるわけではなく、言葉が妨げになっているわけではありません。非常に難しい言葉、たとえばガットとか、ウルグアイラウンドなどはよくわからないんですよ。しかしこれらはわからないと言えば恥ずかしいくらい、知っとらないかん言葉です。ところが間伐を知らなくても、いわんや傘伐、択抜、そういうようなことを知らなくても、誰も恥ずかしがらないということは、言葉にそれだけの説得力がない、つまり何にも知られてないからで、それを言葉に罪を着せると言葉が怒り出すでしょう。ですから変な言い換えをすることは、むしろ自分を卑しめるもんだというくらい私は思います。そこら辺に何か錯覚を起こしているところがあるということも、ちょっと指摘しておきたいと思えます。

山本 その点に関しては私も北村先生と全く同意見でございます。我々法律用語も非常に難しい言葉が出てきます。しかしそれがその新聞紙上とかで宣伝され、あるいはそれが話題になり、さらにそれに関する議論を巻き起こす努力をすると、それを知っていることが必要だという状況が生まれてきます。知らないが皆イミダスで一生懸命引く。だから言葉を易しく説明すること、言葉を易しく言い換えることは別だと思えます。言葉はこのままでいいから、それが流通できるぐらいの力があるべきだし、話題になるべきだし、また話題性になるべく努力する、あるいは近づけるということが必要だと思えます。たとえば風倒木被害にしましても、その言葉を知ってから新聞を読むべきです。私はあのときそうしたので、非常によく理解できて読めました。またそれで現実がどれだけ大変であるかも、一般の人よりはわかったと思うわけです。だからあのとき、もっともってああいう言葉が出てきて、皆がそれを理解できるだけの話題性が提供できれば、随分違っただろうと思うことがありました。

今永 九州の場合この前の災害に関して、よく人工林を作り過ぎとかいうようなことを言われています。北村先生、このような人工林の問題はどうでしょうか。

北村 人工林については、スギを植えてきた人は、何か悪いことをしたように、また花粉症が起るからスギを植えた人を訴えるなんていう、本当に気遣いみたいな人が出てき、人工林が全く白い目で見られています。そして一方雑木林が一番いいから、そこらじゅう雑木林にしなさい、こういうことがまかり通るのです。それは林業をやっている人の立場というのを全く考えておりません。これはもう私がここで言うまでもなく、皆さんの方がよくご存知ですけども、現実にはそういうことがまかり通って、しかもそれが正義であるかのごとく論評として取り扱われておる。これを何とか普通の言い方に変えていただく必要があるわけです。本当に人工林をやっている人は、大変に辛い思いをしております。先だって佐賀県にお邪魔したときも、佐賀県では、人工林率が非常に高いのはどうも今の時世に合わないのではないかと、悩んでおられるようなお話を聞きましたが、そんなことはありません。佐賀県は佐賀県としてのその状況に応じ、土地に応じたやり方で森を愛し、森林とともに暮らしてこられたんで、それを別に悩む必要はない、というようなことを申し上げたわけです。しかしだからといって、どんどん人工林を作りなさいということではなくて、日本の国土はどういう森林を持つのが一番ふさわしいかという

視点が変わっていくべきだということです。人工林はよろしくない、雑木林がよろしいというような話になってきますと、これは堪えられることではありません。ですからこれは将来の展望の中で、もう少し違う視点から包括的に改めてお話しできればというふうに思っています。

山本 人工林という専門的な問題は別としまして、私があるとき県の森林審議会の方から、原稿を書いてくれということで書いたことがあるんですが、これはたぶん一般人の持っている誤解の最たるものであろうと思います。先ず一つは、森、つまり自然というものは、人が手を入れないものが自然である、人が手を入れるということは、自然に対する冒瀆である。自然を守る、環境を守る、地球にやさしいというのは、今標語で、全国どこでも使われるのはもちろん、選挙にまでも使われちゃうんです。そしてその自然を守る、自然に手を入れないというのは、すごく説得力があるんです。私もそう信じておりました。しかし森は手を入れないのが自然であって、手を入れてはいかんのだというのは誤解も甚だしいことです。でもこれを誤解だと知っている人は、ほとんどいないと思います。それから、もう一つはちょっと本題からはずれますけれども、いわゆる林業家、あるいは山持ちさんと言われるものに対する誤解と偏見であります。一般的に30坪ぐらいの敷地に住んで、本当に隣と、軒を接して暮らしている都市生活者から言わせると、大きな森林を持ってらっしゃると、財産価値はほとんどないにも拘わらず、非常に裕福であるという感覚を抱くんですね。ところが現実には、そこらいわゆる経済的なものを回収するのは、非常に長い年月がかかり、なおかつ相続税がかかるのです。相続税の代価まで払って、初めてその財産価値が出るものなのに、一般的に都市生活者には、どうしてもねたみ、嫉妬があるんです。この二つがどうも林業もしくは森林というものを都市から見る場合、つきまとう誤解ではないかと感じるわけです。

今永 これは非常に大きな問題で、ともかく木を切ることが悪いことになってしまっていますときに、一般の人に伐採ということを理解してもらうような手だてはあるのでしょうか。

山本 非常に難しいことだと思うんですけども。私自身ああいう施業を説明されて、現実的に確かにコストに合わないとか、大変だとか、3kという感覚は抱くわけですが、それ以上の深刻さは持ちません。だからやっぱり経済効率的に考えて、都市生活者の中から何かのお金を取り上げることだと思うんです。ここ福岡では水が大変不足しており、昭和53年の大渇

水もあって、水ということには比較的敏感なんです。都市があって、水があって、森があるという、この3つの連携で考えた場合、水は森から来るという感覚は、比較的この頃浸透してきたけれども、そこで都市の住民は具体的に何をすればいいのかということとはわからないんです。じゃあそのキノコか何かを買ってあげるといいのかなあと、そんな話になるわけです。ひどい人になると、水道料金を払ってるからいいだろうという話になるわけですね。こんなのは別としまして、もう少し支払いを増やせばいいんだと思っております。ところがそれは水道局が取るんですよということの理解すらできてないわけです。一時目的税ということが議論されましたが、これも実際現実に提供されている諸種の公共サービスのように、水とか空気に対しても、一般目的税を掛け、これを都市から取り上げることだと思うんです。サービスの提供に対しては、必ずそれに代価を払っているんです。ホテルに泊まっても、御飯を食べてもそうです。だからそういうふうには経済効率全体から吸い上げて、そしてそれを還元する以外に、具体的にわからせる方策はないように思うんです。いくら施業の大変さをスライドや映画にし、小説にしても、まず現実の生活で見ませんので、何の痛みも感じないと思います。

北村 この問題には即決的な答えはないわけです。要するにいかなる制度を作っても、都会の人間、並びに全国民が納得して、その気にならなければだめなわけです。だからこれは林業の技術的な課題ではなく、もっと大きな包括的な議論の中で展開されなければなりません。森林の施業の問題を外の社会の人にいかにか詳しく説明しても胸に訴えるものはありません。どうも今まで林業の方々は、一生懸命になればなるほど、そういうことがらに拘り過ぎて、却って林学、林業をわからなくしている面があったように思います。ところが本当は林業とはもっと森林がいかにかその人間にとって価値があり、意味があるものかということを知らせることだと思います。個々のことがらは知らなくていいとは言わないけれども、知らなくてもかまわないわけです。第一我々はこうやってここに座ってますけれども、皆さんすべて林学の知識を良く知っておられるかということ、そんなことはないと思います。たとえば今永先生ともちょっと午前中こんな話をしたんです。大江健三郎さんがノーベル賞をもらいましたが、我々は大江健三郎さんの小説をどれだけ読んでいるでしょう。ほとんどの人が読んでないわけですね。読んでないけれども、偉い人であることは納得できるということだけで、皆さん彼を評価してると思います。新聞に出たことし

か我々は見ることができませんが、そういうふうな評価の仕方を森林に対してもやってくれるようにならないと、いくら努力しても、これはもう空しいことになるのではないのでしょうか。したがって、たとえば水に対してお金をもらうとか、山村自体に対してお金を払うというようなことになりましても、本来森林そのものに対して、国民全体の胸に響くような同感というか、愛着がわき起こらない限りは、大変に難しい問題になるのではないかと思います。これは後半の方で言おうかと思っていました。将来の展望なんです、将来の展望でも、50年後ということあんまり責任を持ってものを言わなくていい。ところが10年後というと、1年目、2年目、3年目と年次計画で、10年後になったらどうなるかをちゃんと具体的に示さなければいけない。でもできるだけ最終的には50年後へ話をもっていき、最後に国民全体が、森林のことをずしんと痛いほど理解してくれるところへもっていききたいなあと思ってるんです。

今永 どうもありがとうございます。私も次第にそちらの方に話をもっていこうと思っておりましたが、もう今結論めいたことがちょっと出ました。今までのような話のことは、皆さんの方がよくご存知ですし、また非常に身にしみて知っておられるわけです。私はこれから次第に時空に昇っていくことにしようと思っております。すなわち少し空から見ていこうと思います。先生が森林と文化について、ポーランドでしたかね、空から眺めた森林のことを書かれた本を見たときに、先生は視点を時空に移されていかれたような感じがするんですが、このようにもう少し場所を変え、視点を変えていった方がいいのではないかというような感じがします。先生の森林と文化の中にもう一ついいなと思ったのは、ライン川を隔てて、ドイツ側とフランス側の森林のたたずまいが、違うというのがあります。あの辺から先生は、今の森林は創造物、つまり文化だというふうにお話を進められてきたんだらうと思います。その辺のことをお話しいただいて、それから山本先生にアメリカの森林をお話しいただいた上で、50年後の話に移りたいと思います。北村先生、スライドを使って、その辺の話をちょっとお願いします。

北村 これはシュバルツバルドの一つの森林で、こういう素晴らしい森林があります。これは先程の話に出ましたが、ライン川を挟んで東がドイツで、西がフランスで、向こう側にフランスのボーージュの山があり、こちらにシュバルツバルドの森があります。両者は元々一続きであったものが、ライン川が陥没して、それで分かれたわけですから、自然状況が非常に似ています。それにも関わらず歩いてみますと、林

層が全然違うという当たり前のことを、私はここで教えられたわけです。これが私にとって幸運だったと思うのは、そういうようなところに位置しているフライブルグに行けたということにあります。これはボージュから霧の海のライン川を隔てて、シュバルツバルドを見たところですが、両方が島のようにライン川を隔てて浮かんでいて、それが単に二つに分かれたというだけではなく、森林が変わってきているということを実感したわけです。何で違うかという、東がドイツで西がフランスだからで、人間が違うからです。ところがドイツ人であれば、どこでも同じ森林を作るかと言えば、同じシュバルツバルドでも場所によって違います。森林があって、牧草地があって人家があるというような眺め、これが南の特徴です。これは南シュバルツバルドでも少し高いところで、これが、トウヒの森林ですね。観光案内を見ると、黒々とモミの木が茂っているから、黒い森と名前が付いたとなっておりますが、これは嘘です。茂っているのはモミじゃなくて、だいたいトウヒです。それから黒い色で黒い森という名前が付いたんじゃないで、昔は暗黒の森という意味であったわけです。これはモミとブナの混雑林で、現在あまり多くはないんですが、これが昔のシュバルツバルドを思い出すのに比較的近い林層ではないかと思われま。段々とシュバルツバルドを北へ行きますと、森林と牧草地のたたずまいも変わってきております。つまりいろんな条件が働いて、その結果として景観が生まれるということがわかります。北シュバルツバルドはだいたい針葉樹が多いというような違いもありますが、これは単に今までは自然条件の違いということだけ、つまり林学という範疇で森林をみることを教えられてきた我々に、そうじゃなかったということを教えています。一方フランスに行きますと、何となく輪郭がすっきりしないという印象を受けるんです。それはフランスが悪いというんじゃないで、非常にフランス人的な性格が出ております。たとえば大面積の皆伐地もありますが、ドイツあたりではこういうのはないわけです。さらに非常に特徴的なのは、フランスではシラカンバがいっぱい見えます。ドイツではもうほとんどシラカンバを見ることはありません。つまり役に立たないような位置づけをされてしまうんじゃないかと思うんです。ただ住民はカンバを非常に好んでいます。これはゲッチンゲンの近くの昔の東ドイツと西ドイツの国境です。ご覧のとおり、ドイツが東西に分かれている50年の間に、森林が変わってきています。これはあの有名なチューリンゲンの森で、本当にきれいな所です。しかしよく見ると、この辺は酸性雨の被

害が一番多く起こっているということです。これは鉄道線路脇の写真ですが、このように手が入られないのは、こいう所をきれいにするという努力に対して、当時東ドイツの方では、それに価値を認めなかったということ、つまり政策の問題があったわけです。50年間政治が変われば森林がどう変わるかという実験をやってくれたところとも言えます。これはバイエルの風景で、平地があって、農地があってというような景色です。チェコへ入りますと、大体同じような景色が連なっています。同じ文化圏内では景色も似てきます。一方オーストリアでは、お馴染みのチロルの風景、教会があってというように、もっと別な景色があります。これはグラーツですが、これを見て私はいつも、これは日本に似てるなあと思います。日本のどこかの景色だと言われましても不思議に思わないということは、日本人とオーストリア人はよく似ているのじゃないかと思えます。オーストリアにはそういう違った表情があります。これは後半の問題に関係するんですが、ドイツではキリスト教が入ってきて、昔の多神教の時の神様を一掃したと思われていますが、実際にはそういうことはなくて、至る所に、昔の神様が顔を出します。これはフライブルクの門の一つですが、伝説の絵が書いてあります。もちろん教会は非常に大事にされていまして、キリスト教が正式の宗教です。ところが、実際にはそれだけでなく、住民の気持ちの中に神様が住んでいるという話をしたいわけです。その一つが謝肉祭ですね。謝肉祭、つまりカーニバルの中に出てくるのが仮面の人物です。これはパッサーマンの扮装をしています。こういうところに昔の神様が顔を出すようになってるんです。これが向こうの面白いところで、全部キリスト教で説明が付かず、そうではなくて、こういう昔の神様が顔を出す機会があるということです。それから大事なことは昔の神様が森林と人間を結びつける働きをしてくれていることだと思います。これはノルウェーの夏至の日ですが、こういうのを祝う風習というのは、農作業との関係が色濃く残っていることです。これはこの前のリレハンメルオリンピックで雪の中にいっぱい出てきましたが、このようにノルウェーではいろいろな神様が住民の中に生き生きと生きています。キリスト教の祭りがありますと、ここでは農業に関係したお祭りが頻繁に行われ、その都度昔の神様が顔を出して、住民と自然の間を結びつけてくれるように思えます。これはクリスマスの飾りで、宿り木です。宿り木は、カシワ、あるいはナラの木に宿っていた神様が、冬、葉が枯れた時この緑の木に居を移されるということで、大変に大事にされてい

ます。特にフランスで大事にされています。ドイツではそういう景色は見ません。これは12月25日のシュバルツバルドのザンクトペーターというところの若奥様の正装です。

今永 北村先生、どうもありがとうございます。今の写真を見て、あるいはお話を聞いて、山本先生の方から少し感想とか、あるいはアメリカの森林なんかについてお話しただけでないでしょうか。

山本 私資料を読ませていただいたり、お写真を拝見したりして、初めてライン川を挟んで右と左で森が違うということを知ったような次第です。そして全く日本の森林とは感じが違うもんだと思いました。私は実際にはヨーロッパの森林というのを見たことがないのでわからないんですが、アメリカのウィスコンシン州におりましたときに、そこは森と湖の州でございまして、特に北の方に行きますと、もう自分の家に鹿が出てくるというところでございます。私はスティーブンスポイントという非常に北の方に行ってたんですが、そこで感じたのは、森の中に家がたくさんあり、そこに住んでいると、朝鹿が出てくるし、森の一部がちゃんと庭になっているというように、全く皆さん違和感がないんですね。それと同時に森というものについて、創ったものという気持ち全然なくて、元々あったものの森と共存して生きているという感覚ではないかと思えます。これに対しヨーロッパでは、森はもっときちんと造林されるべきものであるというのを拝見し、全然違った感覚だなと思いました。

今永 やっぱアメリカはヨーロッパとはだいぶ違った形だろうと思います。残り時間が30分くらいになりましたので、後は北村先生と山本先生の方で、表題の趣旨にそって、お話ししていただけたらと思います。まず北村先生の方からお話しいただけますか。

北村 その前に今の問題ですが、私もアメリカは全然知りませんのでよくわかりません。どうもアメリカとヨーロッパでは、自然に対する姿勢が違うのではなかろうかというふうに思えます。非常に簡単に言えば、アメリカでは自分が育てたんじゃなくて、あるものを手に入れたのであり、それに対する愛着心が、その後の思想に連なってきています。ところがヨーロッパの場合はその森林とともに過ごしてきた、苦楽をともにしてきたという意味で、森林に想いがこもっているのではないかと思えます。ですから私もは、もし何かを模範にするとすれば、ヨーロッパの方がより近いような感じがします。しかし厳密に言えばどうかはよくわかりません。その辺にアメリカとヨーロッパの違いがあるとすれば、やっぱりこれから私たちはヨーロッパ型で考えていくべきで

はないでしょうか。ヨーロッパではどうなっているか、それは先程ちょっとお見せした中でよくおわかりいただけたかと思えます。そこには長い期間かけて育かれたすごく深い愛着心があると思えます。これはドイツ人は狩猟民族だからかというようなことで片付けられるものではなく、森林に対する根本的な生活態度、生活文化ができあがっているというふうに私は思っています。それが一番羨ましいことです。日本でも日本のそういうような思いが育たねばならないのに、そうじゃない。そうじゃないというのは、一つ先程のスライドにちょっと補足して言えば、それは所が変われば、森林も変わるということです。ところが日本では、森林はどこに行っても同じという感じがいたします。それに対してフィンランドには有用樹種は三つしかなく、ドイツトヒと、ヨーロッパアカマツとカンバです。それをいろいろと組み合わせると、非常にバラエティーに富んだ施業を行っています。日本では夥しい樹種がありますが、見たら一斉林です。つまり日本の森林は明治以降ずっと画一的な方向でやってきたが、この限界が今やってきていると思えます。ですから画一的な森林を見たとき、それに対する愛着が果たして浮かぶだろうか、その愛着が深まるだろうかということをお考えすると、やっぱり限界がありまして、浅いところで留まっているのではないかと思えます。それに対して今日では、例えば照葉樹林文化というのが唱えられ、一方ではブナ林帯文化が唱えられてきています。そういうことは他の分野では話題になりますが、森林の方ではその取り扱い、あまり話題にならなかったんじゃないかと思えます。確かに森林帯の水平的分布とか、垂直的分布とかは習いますけれども、それ限りで終わってまう。そこら辺に日本人の愛着を深めさせない要因があったような感じがします。それには一つの問題として、画一的ということから脱却しなければいけないと思えます。

山本 今の画一的という問題ですが、人はいろんなものがあってそれぞれに発見ができるような場所を歩くことを非常に好みますね。何でもないような雑木林に子供を連れて行くと、一日遊ぶんです。ただ親は非常に大変なんです。追いかけ回して、危なくないかどうか一日中監視して回らなければならない。それから言うと、施設を作っていたらできれいに造林してあるところは楽ですが、子供にとっては遊園地で遊んでるのとちょっと変わらないわけです。ディズニーランドに行ってるのとちょっと変わらないんです。帰ってきて感想を聞いても、あのすべり台がよかったとか、あそこのホテルの料理がまじよかったとかで、森の話は出てこない。けど何で

もないところに連れて行って、一日中駆け回らせて、いろんな木を見せるとそれだけで楽しいんです。確かにこれは社会的な問題なんでしょうけれども、つまりレクリエーションという意味で私達は非常に社会的・時間的制約を受けます。だからその辺の兼ね合いが難しく、施設ではなく、アクセスをどうしたら子供と一緒に森で楽しく過ごすことができるかを常に考えるんです。

北村 それは50年先に向けての一つの大きな課題ですね。私も今の話は同感でありまして、確かに自然そのままの中で遊ぶということを、子供もそうしたいんですけども、親の方が慣れてないんですよ。それで芽を摘んでいるというようなことがあります。戦後特に自然離れが進みまして、もう今の親の世代が自然の中に行きどうしていいかわからないんですね。そうすると、子供が危ないところへ行こうとすると、それを何とか止めようとするわけです。そして事故が起こりますと、すぐ責任者は誰かということになります。ドイツでもどこでもそうですけども、そんなところでは事故の負担保険に入れと書いてありますから、怪我した方が悪いです。この前にドイツとフランスの人を呼んで、シンポジウムをやったことがあります。そこでそれぞれの国で子供に対する森林教育、自然教育をどうしていますかと聴いたら、さすがのドイツはカリキュラムもちゃんとしていました。ところがフランスでは、特別なにもなく親が子供を森林に連れて行くことぐらいかなあということでした。私はこれほど、すばらしい考えはないんじゃないかなあと思いました。親が森林に行かなくて子供が森林に行くことはあり得ない。それを何とか復活しなければならぬ。一回自然との関係が切れていますから、これから青少年に対しては、それなりの方法を考えなければならぬ。こないだ、「森林教育の進め方」という本が出ました。私はその中に書いておりますから悪くも言えないし、良くも言えないんですけども、ああいうものが本当に必要になってきているんだと思います。しかし基本は今おっしゃったように施設なんです。施設がなかったら誰も遊べないんです。ところが施設にどういふものが必要かということより、施設さえあればという話になります。日本の中に外国を作って喜んでいるわけですね。その問題を順番に解き明かしていくと大変なんで、この後でもう少し別の話にいきたいと思います。

今永 私は子供を連れてドイツで生活したことがありまして、そのときに感じたことは、ドイツでは小学校2年くらいでしたか、トウヒとモミの違いということが教科書に出ていました。それからドイツでは小

さい靴から順番に山靴が並んでいるということでした。これはやはり、かなり山歩きということに親しんでいる証拠でしょう。ところが、この森林レクリエーションというのは、やはり廃りがありまして、私が10年くらい前に行ったときには、バンデルングとトリムとラングラウフでした。トリムというのは日本でもフィールドアスレチックなんかによく入ってきてやっていますからご存知でしょう。ドイツのものは日本のものと比べて、非常に素朴ですが、日本のものはすごく立派です。3年前にはトリムは少し廃れて、林内の自転車走行がはやっていました。もう一つこういうこともありました。昔はドイツでも山の中を自由に歩いていて、人が集まる場所というのが必ずしも固定されていなかったが、この前行ったときには、やはり歩道とかに人が集まるような傾向が出てきていると聞いたんです。10年くらい経つと、何かそういうレクリエーションも変化が出てくるようです。よく日本は外国ではやったらすぐ取り入れたいという面があります。

北村 先程から森林の多様な機能が着目されるようになったというお話がございましたが、これはもうまさにそのとおりですね。今まで我々の知らなかった森林の価値というものがあると発掘され、認識されるようになりました。しかしまだ我々が住んでいる林学の世界では、技術的な範疇にとどまっているのではないかという感じがしてなりません。技術的な範疇といえば、例えば複層林施策とかいろいろなことが出てまいります。その中にとどまっている限りは、おそらく今の状態と同じことが続くだろうということで、技術的な範疇を超えて、文化的な森林の意味に着目しなければなりません。お断りしておきますが、このように森林というものの意味がどんどん広がっていきましても、それは林業という生業をやっておられる方の地位を低からしめるものじゃありません。それは非常に大事なことで、それ以上にまわりが意味を持ってきたことでありますから、我々のやっていることは文化に押しまくられて、今影が薄くなったと思われることは毛頭ありません。ところが文化の問題になりますと、文化とは一体何だろうか、いろいろな話が出てきて、もう何がなんだかわけがわからなくなります。そんな難しいことじゃなくて、その技術的な範疇を超えたものだというふうにお考えいただきたいと思います。そうしますと、これは林学という今まで住んでいた世界では到底片づかない。そうしますと他のものと連携しなければならぬ。連携するということは、学問的に言えば、学オ的領域を開拓するということです。要は他の者が森林に積極的に関心を持つよう



に努力しなければならないということです。それは今まで多くの人がそういうことをやっています。例えば小説家です。森という言葉が寓意的にでも使われているものを洗い上げると、相当な数になると思います。私が一番感心したのは、いろいろな本に引用しているんですけども、ロシア文学者の木村弘さんのロシアの美的世界を上回るものを見たことがないんです。あれこそ森林の意味を文学の世界から痛いほど胸に植え付けてくれるすばらしい記述だと思えます。そうすると専門家というのは単なる個々の技術を知っているだけで、全体を見る目を失っているのではないか、それが今の林学の生き方ではなかったかと思っております。そういうふうには、文学の方から熱い視線が注がれている。大江健三郎さんだって、森とか木という言葉をよく使っています。そういうわけで、手がさしのべられ、関心を持って皆さんがこちらを見ているわけです。そういうものに対して我々はどう応えたいのか、それに打って出る必要がある。先程ご紹介がありましたように、今比較文明学会という大それたものに入りまして、それこそ文明と文化の違いは何かということ、全然わからないことをやっているんですが、またこれほどおもしろいことはありませんですね。森林というものを全く違う視点から見た話をいっぱい聞きます。これが私にとってどれだけ励みになるかわかりません。ご存知の名前では安田喜憲さんなんか、目に見えないような花粉から、全世界の文化の歴史を見ようなんていう大それたことをやっているんです。それだけではなくて、あの人は、文化的な方からではなく、花粉分析の方から、また哲学の人も我々の領域に入り込みたがっています。実は自然科学的知識が乏しいわけですね。その助けを借りたいということで今、熱い視線を投げかけている。自然科学そのものが、今までのような対象を突き放した生き方では、もう解決しないところまで来てます。これは西洋の自然科学が入ってきてから、我々がそれを遵奉して、学問においては今までひたすらその考えで走ってきたわけです。しかし自然科学そのものが転換期にきてます。私はそんな例としてよく言うのですが、古里というものは単なる知識的な記述では、面積がいくらで、人口がいくらということに過ぎないけれど、そこを古里にする人の思い入れの深さというものは、誰にも、また何によっても動かしようのないものなのだということが、今や私は科学の世界に要求されているのだと思います。そういうようなことを哲学的に裏づけてくれるという非常にありがたい状況になってきていますから、私はこの森林に対する哲学的な発想というものが今育たな

ければならないというふうに思います。私がそう思っている間にも、さすがに哲学者は頭が良くて、たとえば梅原猛さんが森の思想は人類を救うというような偉いことを書かれました。哲学者の方でも今のようなことを指向しているのですから、哲学者とも一緒になっていくべきです。こうして新しい世界が開けますと、森林の意味というものは、放っとしても国民の胸にずしっとしみわたるようになります。水源涵養なんて無理に言わなくてもいいんです。こんなものは林学者だって、誰だって見たことがないんです。教科書に書いてあるからそう言うだけです。試験の答案としては模範解答ですけど、本当に我々が実感をしてそう思ってるかということと実際は違います。それは他の人には測り知ることのできない森林に対する愛着心の証です。これが我々に林学、あるいは林業をやらしている一つの原動力だと思うんです。それを国民に広げるといようなことを今から考えるべきで、50年後には私はこれはできていると思います。

山本 私には法律家で、林学とはあまり縁がありません。私は私なりの法律の学会に入っているわけですが、どこでも同じ問題に遭遇していると思います。法律というのは非常に制度的な問題、手続き的な問題が多いわけですけども、その中で六法全書を見ていると、それでいいのか、もっと違うところ、哲学でもいい、歴史学でもいい、もっといろんなところで手をつながなくちゃいけないというような話がよく出ます。結局法律も含めて、すべての学問も、自然も人間も、元々全部一つだったと思うんですね。一つのことを全部人間に考えるというのは無理だから、たまたま便宜的に皆さん分割してきたようなものだと思うんです。ですから全く単体として存在しているものはないと思うんですね。文学者も、哲学者も、法律家も、市民も皆森を見ている。そういう自信を持っていいのではないのでしょうか。いろんな人が森を見て、子供も見て、林学の方も見て、愛されている、皆が注目できるものを皆さんは研究のテーマに持っておられる。もっともっと胸を張って他の分野の方とお話をなさっていいのではないかと思います。林学の方の中に小説をお書きになる方が出てきてもいいんじゃないかと思います。そうするとそこには哲学も入ってくる、文学も入ってくる、歴史も入ってくる、そして皆さんの持ってらっしゃる森林の技術的な面、あるいは森林に対する考え方も出てくるでしょう。打って出るという話が北村先生からございましたが、そんな方法でもいいからもっと胸を張って参加されたらいいかなというふうに思っております。そうすれば私どもも近づき、考えさ

せていただけるという機会があるのではないかと  
思っております。

今永 大変いいお話を承りました。だいたい時間が  
迫っておりますが、北村先生最後に何かいかがで  
しょうか。

北村 ちょっと言い忘れたことで、申し上げたいのは、  
ドイツあたりでは、森林の取り扱いに関しては、一  
般の人は完全にこれを森林の技術者に任せ、また森  
林の技術者の方はそれに応えるだけの技術水準を持  
って、お互い制度上でもきちんとやっているという  
ことであります。それが一つと、先程折角スライド  
をお見せしながら説明しなかったんですが、ヨーロ  
ッパではいろいろと昔の神様がおいでになって、住  
民の気持と森林を結びつけているということです。  
これは日本では今まで見落とされていた面ではな  
いかと思います。つまり、ドイツ林学が入ってきた  
ときに、林学、林業の体系だけを入れまして、そのま  
ま適用したというのが実際の姿ではなかったかと思  
います。トランクだけ持ってきて、中身は何も入っ  
てなかったという感じがします。向こうに忘れてき  
たものをもう一回見に行きましょう、もう一回発掘  
しに行きましょうというのが私の気持ちです。です

からそこら辺にも問題があったようです。今あらた  
めて林学に関しての哲学的な思考が必要だというこ  
とです。しかしそれは林学、あるいは林業のそもそ  
もの立場を危うからしめるのではなく、林学をや  
られる人がもっともっと考え方を広げていくとい  
うことが今日の責任であろうと思います。

今永 どうもありがとうございました。今日の話はこ  
れくらいにしたいと思います。とりまとめが十分で  
きませんでした。山本先生の小説のお話、北村先生  
の大江健三郎さんのお話にもありましたように、森  
林が真の意味で人々に愛されるようになれば一番い  
いのではないかと思います。50年後にできるかどう  
かわからないところはあります。我々の立場として  
は、技術は磨いてきたとしても、哲学的な思考、文  
学その他との提携といったものは確かに欠けていた  
と思います。今後森林を考えるときに、今日お話し  
いただいたことを少しでも役に立てられたらいいな  
と思っています。皆さんには長いことご静聴いた  
きましてありがとうございました。

---

(本特集は鼎談録音テープをもとに整理、編集したも  
のである。文責 谷口義信)